正岡子規の古典研究と俳句実作への還元
―芭蕉句および蕉風俳諧を中心に―

福井　咲久良

Abstract

This paper discusses the facts and implications of Masaoka Shiki's seemingly contradictory views on ancient haiku and aiming for his haiku innovation. Shiki strove for his haiku innovation, but he did not advocate abandoning all the past haikai traditions. In "Haikai Taiyo," Shiki recommended the same number of haiku books, especially those related to Buson, such as "Buson Kushu," and those related to Basho and Shofu haikai, such as "Haikai Shichibushu." In other words, it is possible that he drew on his own policy of reforming haiku from Basho's haiku and Shofu haikai, which the old school uncritically revered. The author believes that there are two reasons why Shiki recommended reading these works. The first reason is that he found the possibility of creating "novelty" haiku in the two outlooks that he observed from Basho's haiku and Shofu haikai. That viewpoint is, firstly, the attitude of wandering through the hills and fields and gathering plans from "Zouka" as the world. Next, it is the approach of observing things from "Zouka" as they are and expressing them in words. The second reason is that Shiki valued these compositions as models for his actual works.

キーワード……正岡子規　俳句　俳句革新　芭蕉　蕉風俳諧

はじめに

正岡子規の目指した俳句革新は、子規らが、古くて「陳腐」な旧派を批判する形で展開された。そして、この革新については、旧派の「月並調」(1)の句に対して、子規らが「新奇」な句を次々に発表していったという点が脚光を浴びることが多かったように思われる。

しかし、子規はその俳句革新において、過去の俳諧伝統をすべて捨て去ることを主張したわけではなかった。後述するが、子規は、古句を学び、そこから実作への手がかりを掴むことを説いている。

しかし単純に考えて、古句に学びそれを俳句の実作に反映させることは、「古人の類句」(2)に陥り「陳腐」な句を生む危険があることのように思われる。

では、「新奇」を生むために古句に学ぶという一見矛盾したような手法をとる必然性は、どこにあったのであろうか。また子規は古俳諧からどのような点を学び取ったのであろうか。

本稿では、俳句実作者に対し、古句を読むことを奨励する子規の発言に焦点を当て、古句を読む意義について、子規がどのように考えていたのかを検討したい。

第一節　俳句実作者にとっての古句

（1）実作への古句の活用法その一――古句の消極的活用――

子規は、『俳諧大要』（明治三二年一月、ほとゝぎす発行所刊）にて、古句を学ぶことの利点や必要性を、次のように述べている。

一点目は、「修学第一期」つまり俳句初学者を対象としたものである。

一古句を半分位窃み用うるとも半分だけ新らしくば苦しからず時には古句中の好材料を取り来りて自家の用に供す可し或は古句の調に擬して調子の変化をも悟る可し

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一一日）

ここにはかなり直接的な、古句を読み俳句実作に還元する方法が述べられている。

まず、古句を半分位盗用するのも、残りの半分が新しければ差し支えないとする。従って、時には古句の中から「好材料」を取ってきて自分の句に用いるのも良いとしている。また、「古句の調」に似せて、「調子の変化」をも悟るのが良いとしている。このあたりは、特に初学の俳句実作者に対するアドバイスとして、首肯しやすいものと思われる。

二点目は、「修学第三期」、即ち俳句を学ぶ上で最後にして終わりのない境地に達した者たちを対象としたものである。

一俳句につきて陳腐と新奇とを知るは尤も必要なり陳腐と新奇とを判するは修学の程度によりて其範囲を異にす俳句を見る事愈々多ければ其陳腐を感ずること随つて多かるべし第二期に在る者初学の俳句を見れば只其陳腐なるを見る第三期に在りて第二期を見る亦此の如きのみ而して能く新陳両者の区別を知るには多く俳書を読むに如かず

（『俳諧大要』第七　修学第三期。初出新聞『日本』明治二八年一二月二三日）

子規は、俳句の「新奇」と「陳腐」の区別を付けられるようになるために、俳書を多く紐解き、俳句を多読することが肝要であると説いている。

ここで俳句における「陳腐」と「新奇」の定義を、子規の発言から確認しておきたい。

○問　新俳句と月並俳句とは句作に差異あるべきものと考へらる。果して差異あらば新俳句は如何なる点を主眼とし月並句は如何なる点を主眼として句作するものなりや。

答　新俳句とは新派俳句の事を謂ふか。新派にも種々あるべく我尽く之を知らず。若し我俳句に就きて言はんか。（略）

第二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み新奇を嫌ふ傾向あり。例へば『黄鳥の初音や老の耳果報……蓬宇』の如き誰が聞きても陳腐なるべきを此老俳諧師は今更のやうに作れり。此句の如き必ずしも類句を挙げて而して後始めて其陳腐を知る者にあらざれども念のために古人の類句を示さんに

鶯の耳に順ふ今年かな　紹巴
鶯や耳これを得て今朝の春　昌察
鶯や耳の果報を数ふ年　梅室
六十の春
鶯に耳面白き今年かな　乙由

の如きあり。殊に梅室の句は最とも相類似せるを見る。

（『俳句問答　上之巻』（明治三四年一二月、俳書堂・金尾文淵堂書店刊）初出新聞『日本』明治二九年七月二七日）

ここからは、「陳腐」な句とは、「古人の類句」、「相類似せる」句が既に多数存在する句であることが看取される。

逆を言えば、俳句の「新奇」なる句とは、「古人の類句」が限りなく少ないか、存在しない句と解することができる。

したがって、『俳諧大要』にて「修学第三期」のものたちに子規が説いているのは、「古人の類句」ばかりの「陳腐」な句ではなく、「新奇」な句を作るためには、「古人の類句」が如何なるものかを頭に入れておく必要があるということである。そして、そのためにできるだけ多くの俳書を繙く必要があるということであると諒解される。ここからも、俳句実作者が「新奇」な句を生むために、古句を学ぶという一見矛盾したような手法をとる必然性が見て取れる。

以上二点、子規の指摘する、古句を学ぶ利点や必要性を確認してきた。

ただし、これらの二点だけで、子規の目指す「新奇」な俳句を精力的に生み出すことは困難であろう。

まず、俳句初学の段階での古句の利用という一点目は、積極的に古句を活用せよという種の指南ではなかった。むしろ「時には」という条件付きの、初学者向けの消極的な活用法であったと言う方が正確であろう。

続く二点目は、俳句の最終的境地に達した者たちに対して、同類句に陥らないための、いわば確認作業ができるようになることの必要性を説いたものである。これもやはり、「新奇」な作品を生むための古句の積極的活用とは言いがたい。

要するに、先の二点いずれをとっても、子規が目指す「新奇」な俳句を生むことに直接的につながるとは考えがたいのである。

では反対に、古句を読むことが子規の目指す「新奇」な俳句を生むことに積極的につながるとしたら、子規はどのような活用法を想定していると考えられるであろうか。

（2）実作への古句の活用法その二―古句の積極的活用―

1、子規が重視した俳書

子規が古句を読むことを薦めた理由は、古句からその創作のあり方を学び取ることにある。実は古句には、その時代時代で「新奇」な作品が多く存在する。では、それらはどこに存するのであろうか。子規は、『俳諧大要』および『俳句問答』にて、俳句初学者向けに、具体的に俳諧集を列挙し紹介している。

一古人の俳句を読まんとならば総じて元禄明和安永天明の俳書を可とす就中俳諧七部集続七部集蕪村七部集三傑集など善し家集にては芭蕉句集（何本にても善けれど玉石混淆し居る故注意す可し）去来発句集丈草発句集蕪村句集などを読む可し但しいづれも多少は悪句あるを免れず中にも尤とも悪句少なきは猿蓑（俳諧七部集の内）蕪村七部集蕪村句集位なる可し（故人五百題は普通に坊間に行はれて初学には便利なり）

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一一日）

○問　俳句を学ばんとするには古人著書中初心に適する者何なりや。

答　初心に適する者とて小学読本の如きは無し。たま〳〵初学者を指導すべきために作りたる書（芋環、真木柱の如き）無きにあらねど全く邪路に陥りて或は文学以外に度（わた）りたりと覚ゆる処少からず。此等は読むべからず。初学者には類題の集こそ善かるべけれ。俳諧七部集、蕪村七部集、類題発句集、俳諧新選、題林発句集、新題林発句集、三傑集、故人五百題等先づ読むべき書なり。各家の集も漸次に味ふべし。

（『俳句問答』初出新聞『日本』明治二九年七月二九日）

第一に、前者の記事において子規は、俳句初学者には「元禄明和安永天明」の俳書が適当であるとしている。「元禄」（一六八八～一七〇四）は芭蕉（正保元（一六四四）～元禄七（一六九四））の活動期に重なる。また、「明和」（一七六四～一七七二）、「安永」（一七七二～一七八一）、「天明」（一七八一～一七八九）の一連の時期は、蕪村（享保元（一七一六）～天明三（一七八三））の活躍期と重なっている(3)。

第二に、後者の記事から、「類題の集」、つまり類題句集が適当であるとしていることが読み取れる。さらに「各家の集」、つまり俳人個人の私家集も、段々に読んでいくことを薦めている。

第三に子規は、いずれの記事でも具体的な俳書名を挙げて初学者に薦めている。これらの俳書はどのような性質を持つものであろうか。以下、二つの記事で重複する俳書を中心に、各俳書の概要等を簡単に確認しておきたい。

2、子規が初学者のために挙げた俳書群の概要

①「俳諧七部集」と「続七部集」

まず、いずれの記事でも第一に名前の挙がっている「俳諧七部集」から見ていきたい。「俳諧七部集」は柳居（貞享三（一六八六）～延享五（一七四八））編の俳諧叢書『俳諧七部集』を指す。子規は『俳諧七部集』を次のように紹介している。

> 俳諧七部集といふ書あり。最遍く坊間に行はる。板行の書亦五六種より猶多かるべし。此書は「冬の日」「春の日」「ひさご」「あら野」「猿蓑」「炭俵」「続猿蓑」の七部を合巻となしたる者にて安永の頃より始まりし事にや。其後寛政享和の頃続七部集及び七部集拾遺出で文政十一年に新七部集を出だせり。其外天明以後には其角七部集蕪村七部集樗良七部集暁台七部集枇杷園七部集道彦七部集乙二七部集今七部集等続々出でたれば此等に対して俳諧七部集を芭蕉七部集とも言ふべきか。
>
> （『増補再版獺祭書屋俳話』（明治二八年九月、日本新聞社刊）より「芭蕉雑談」内「著書」項。初出新聞『日本』明治二六年一二月二四日）

加藤定彦はこの書の特徴を、「蕉風の原点に帰るべく七部を選定し、亀鑑としたもの」（『俳文学大辞典』「俳諧七部集」項）と紹介している。

その中でも「猿蓑」は去来・凡兆編による俳諧撰集である。其角序、丈草跋、元禄四年刊で、『俳諧七部集』の第五に当たる。阿部正美は「入集句数では凡兆四一句、芭蕉四〇句（略）一句のみの入集の作者も七一人に及び、当時の蕉門俳家がほぼ網羅される。（略）編者二人の背後には芭蕉が眼を光らせており、句の選を厳しく指導したことは、『去来抄』に伝えられた編集中の逸話などによっても明らかである」（『俳文学大辞典』「猿蓑」項）と指摘しており、『俳諧七部集』の中においても芭蕉の影響の特に濃い書であることが窺える。

「続七部集」は闌更（享保一一（一七二六）～寛政一〇（一七九八））編の俳諧撰集『俳諧続七部集』[4]を指すものと思われる。山本和明によれば、『俳諧七部集』には、芭蕉の連句未収の『はるの日』を含むなど七部集と呼ぶに不合理な点があるとし、これに対し不合理を正した新しい七部集を編む意図をもって編まれたもの」（『俳文学大辞典』「俳諧続七部集」項）であり、やはり蕉風の俳書であることがわかる。

②「蕪村七部集」

「蕪村七部集」とは、菊舎太兵衛ほか編の俳諧撰集『蕪村七部集』である。中野沙恵は「几董編『其雪影』『あけがらす』（『あけ烏』）、蕪村編『一夜四唫』（『此ほとり』）『花鳥篇』、几董編『桃李』（『もゝすもゝ』）『続あけがらす』『続四歌仙』（『続一夜四可仙』）、

維駒編『五車反古』の八部を収め、（略）蕪村関係の主要な撰集は入っている」（『俳文学大辞典』「蕪村七部集」項）とする。

「三傑集」は車蓋編の俳諧句集『発句三傑集』(5)を指し、ここでの「三傑」とは、闌更、暁台（享保一七（一七三二）～寛政四（一七九二））、蓼太（享保三（一七一六）～天明七（一七八七））の三俳人である。

闌更は「蕉風復興を志し」（『俳文学大辞典』田中善信「闌更」項）、先出の『俳諧続七部集』を編んだ人物として知られる。

暁台は、「はじめ伊勢派・美濃派の俳諧を学び、平俗な小理屈の作風であったが、やがて芭蕉に学び、蕉風復興を志し、特に芭蕉の『冬の日』の時期の作風を慕い、高雅な詩趣を示して中興俳諧の一翼を担った」（『俳文学大辞典』山下一海「暁台」項）と評される人物である。

蓼太の「俳風は、師吏登の所説を受けて芭蕉晩年の炭俵風を基調とし」（『俳文学大辞典』加藤定彦「蓼太」項）たものである。

以上のように、三者いずれも蕉風復興を志している点が共通している。

③「各家の集」と「故人五百題」

「各家の集」についても見ておきたい。「芭蕉句集」は、土芳編『蕉翁句集』ほか多数存する芭蕉の句集を指すと思われるが、「何本にても善けれど玉石混淆し居る故注意す可し」と注意書きがある。

「去来発句集丈草発句集」は一般に、蝶夢（享保一七（一七三二）～寛政七（一七九五））編『去来発句集』(6)と呼ばれる俳諧句集である。

「蕪村句集」は几董編『蕪村句集』(7)を指す。「『蕪村自筆句帳』より八六八句を選び、ほぼ四季類題別に改編」（『俳文学大辞典』尾形仂「蕪村句集」項）したもので、蕪村の家集にして類題句集でもある書と見ることができる。

「故人五百題」は松露庵烏明編、亀足・瓜州校の俳諧撰集『故人五百題』(8)で、広く流布した類題句集である。

④子規が俳句初学者に薦めた俳書の特徴

二つの子規の記述から、子規が俳句初学の者に対し、読むのを認めた書物の条件は、次のように整理できる。

第一に、芭蕉や蕪村の活動期の俳書であること。

第二に、その中でも、柳居編『俳諧七部集』、闌更編『俳諧続七部集』、菊舎太兵衛ほか編『蕪村七部集』、車蓋編『発句三傑集』、土芳編『蕉翁句集』など芭蕉の家集、几董編『蕪村句集』などを読むべきだとすること。

第三に、その中でも「悪句」が少ないのは、去来・凡兆編『猿蓑』、『蕪村七部集』、『蕪村句集』であること。

ここに名の上がる俳書はいずれも、芭蕉と蕪村の活動期との重なりを追求している点に共通項が見られる。特に芭蕉に関しては、選集に芭蕉が強く関わっていたとされる『猿蓑』を最良の書の一つに挙げるなど、強い蕉風追求の姿勢が看取される。具体的に名

前の挙がった俳書から、蕪村に関する俳書を除くと、いずれも蕉風俳諧および蕉風復興を志したものであるといえる。

さらに第四として、子規は松露庵烏明（うめい）編『故人五百題』が、市中に広く流布していて、俳句の初学の者には都合が良いとしている。

この第四をわざわざ付した背景としては、『故人五百題』の内容もさることながら、「悪句」の少ない俳書として挙げた『猿蓑』『蕪村七部集』『蕪村句集』のうち、特に、『蕪村句集』が、明治二八年の時点ではまだ殆ど流布しておらず、なかなか手に入らなかったという事情も考えられる。

3、『俳諧七部集』などを重視した理由

さて、子規が画家蕪村を俳人として「再発見」し、称揚したことは広く知られている（9）。

他方、芭蕉に関しては、子規が芭蕉を強く批判した、あるいは、芭蕉と代える形で蕪村を称揚したとする先行研究も確認された（10）。にもかかわらず、子規が俳句初学者に対し、蕉風俳諧や蕉風復興を志した俳書を薦めたのはなぜであろうか。

子規は「俳諧大要」「修学第一期」の冒頭で、俳句初学者に対し、次のように指南している。

一俳句をものせんと思はゞ思ふまゝをものすべし巧を求むる莫れ拙を蔽（おほ）ふ莫れ他人に恥かしがる莫れ

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一日）

ここで子規は、俳句初学者に対し、俳句を「思ふまゝ」に詠めと言っている。では、俳句を「思ふまゝ」に詠むとは具体的にどのようなことか。

一初学の人俳句を解するに作者の理想を探らんとする者多し然れども俳句は理想的の者極めて稀に事物をありの儘に詠みたる者最も多し而して趣味は却て後者に多く存す例へば

古池や蛙飛びこむ水の音　　芭蕉

といふ句を見て作者の理想は閑寂を現はすにあらんか禅学上悟道の句ならんか或は其他何処にかあらんなどゝ穿鑿（せんさく）する人あれどもそれは只だ其儘の理想も何も無き句と見る可し古池に蛙が飛びこんでキヤブンと音のしたのを聞きて芭蕉がしかく詠みしものなり

稲妻やきのふは東けふは西

といふは諸行無常的の理想を含めたるものにて俗人は之を佳句の如く思ひもてはやせども文学としては一文の価値無きものなり

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一一日）

俳句初学者が句を読むとき、とかく句に込められた「理想」を追究しがちであるが、実際は「事物をありの儘に詠みたる」句が最も多く、またそのような句の方に「趣味」が多いと説いている。この、「事物をありの儘に詠」む姿勢こそ、芭蕉の俳諧に子規が認めた「新奇」な句を生む可能性ではなかったか。それと同時に、俳句初学者に子規が求めた、実作の姿勢ではなかったか。

復本一郎は、「子規は、芭蕉句を、あくまでも自己とのかかわりにおいてのみ作られる類（たぐい）の「記実」の句だと評している。逆の視点より見れば、それこそが芭蕉俳句の特色として指摘し得るということであろう。「記実」とは、「写生」「写実」「ありのまま」等と一般である」(11) と述べている。

さてこの、「事物をありの儘に詠」むという姿勢は、しばしば子規によって賞賛されている。

○俳句は短し、故に天然を写しても詳細なるを得さる程なれは況して修飾を施すへき余地少し、俳句は簡にして尽さんとする必要より美の最も多き部分のみを取り其他醜なる者と不要なる者と美の少き者とは之を捨つるの已むを得さるに至る、されは故意に修飾を為さすとも自然と修飾を為したる訳なり、いよ〳〵以て俳句は実景を写さんと心かくへし、実景を写すために形勝を採り山水に遊ふは佳句を得る第一良法なり、芭蕉か越後の出雲崎に出て佐渡を望んで

あら海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

と詠したるは実景をそのままに写してしかも成功したる者なり、

畑打のはるかに一人二人かな　行露
子をつれて岩にふり向く雉子かな　魚光
鶯や枝から枝へ鳴きなから　柏舟
若草の中行く水の小鮠かな　快之
鼻紙の間に萎む菫かな　その
麓迄下りれば花の夕かな　敬止
石地蔵筒一ぱいのつゝしかな　嘯山
水澄んで籾の芽青し苗代田　支考
凧ひかへて渡る小川かな　舎羅
御手洗の木の葉の中の蛙かな　好葉
小松引真白に細きかひなかな　滄波
ふり向けば灯とぼす関や夕霞　太祇（ママ）

の如きも皆実景実事をありのまゝに写したるのみにて殆んど修飾を加えざる処に天然の美の発揮せられたるを見る、（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第二号、明治三〇年二月一五日）

豪壮に非ず華麗に非ず奇抜なるにも非ず滑稽なるにも非ず、はた格調の新奇なるにも非ず、只一瑣事一微物を取り其実景実情をありの儘に言ひ放して猶幾多の趣味を含む者には

五月雨や色紙へぎたる壁の跡
さゝれ蟹足這ひ上る清水かな
海士が家は小海老にまじるいとゞ哉
ひいと鳴く尻声悲し夜の鹿
松茸や知らぬ木の葉のへばり付く
橙や伊勢の白子の店ざらし
行秋の猶頼のもしや青蜜柑
鞍壺に小坊主のるや大根引
塩鯛の歯茎も寒し魚の棚

の如きあり。

（『獺祭書屋俳話増補』より「芭蕉雑談」内「各種の佳句」項。初出新聞『日本』明治二六年一二月二〇日）

以上の記事のように、子規は、「事物をありの儘に詠」んでいる句を、「実景をそのままに写して」、「実景実事をありのまゝに写したるのみにて」、「其実景実情をありの儘に言ひ放して」と言葉を換え、繰り返し賞賛している。さらに、事物をありのままに詠むための手段として、「実景を写すために形勝を採り山水に遊ふは佳句を得る第一良法なり」と述べている。

この、「実景を写すために形勝を採り山水に遊」ぶことを、旅を以て実践した芭蕉について、子規は、「芭蕉は好んで山河を跋渉したるを以て実験上亦夥多の好題目を得たり」(12)と評価している。

○実景を直写したる句は、言はゞ立案者造化、句作者俳人某ともいふべき者にして、趣向立ての上には毫も作者の手柄無し、（其景を選り出したるだけが手柄なり）故に世人も之を貴はぬ者多く作者自身も亦其価値を知らぬこと屢なり、然れども多く作り屢誦し月を経、年を重ねたる後再び之を見るべし、必ず実景的の句の趣味深きを知らん、空想を凝らして得たる句は其当時は無上の名句と感ずるも、一年二年を経て後に之を誦すれば嘔吐を催すべき者少なからず、這般の事は理窟を並べて論ぜんより実際に就きて試験するが近道なり、

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第二号、明治三〇年二月一五日）

一俳書を読むを以て満足せば古人の糟糠を嘗むるに過ぎざるべし古句以外に新材料を探討せざるべからず新材料を得べき歴史地理書等之を読むべし若し能ふべくんば満天下を周遊して新材料を造化より直接に取り来れ

（『俳諧大要』第七　修学第三期。初出新聞『日本』明治二八年一二月二三日）

○実景より句を得んと欲しなば何時にても歩行くべし何処へでもいくへし、俗人は旅行物見は春を善しとすと言ひ、所謂風流人は行脚散歩は秋に限りたりと言ふ、是れ詩趣を解せぬ

なり、俳句を得んとするには春も夏も秋も冬も一様に宜しく敢て甲乙を言ふべきにあらす、俗人は名所見物とて京、江戸、宮島、日光などへ行くことを喜び所謂風流人は歌枕を探るとか山水に傲遊するとか称へて須磨、奈良に遊び富士、妙義に上るを好む、此等の処固より詩趣無きにあらねど詩趣は此等の処に限るにあらす、詩趣は地球の上、雲霧の外、見る処、到る処に満ち〳〵たり、

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第二号、明治三〇年二月一五日）

かつて芭蕉が旅をし、「形勝を採り山水に遊」んで佳句を得たように、俳句実作者に対して、「実景を直写したる句」を作ることや、「実景より句を得」ることを、子規は奨励している。さらに、その言説の中で、「造化」という、芭蕉の言説の影響ともとれる語を使用している点にも注意が必要である。

要するに、子規は、俳句革新の方向性や方法論を蕉風俳諧から汲み取ろうとしたのであろう。反対に蕉風俳諧の側から言えば、蕉風俳諧が、子規の俳句革新の方向性や方法論に大きな影響を与えたということになる。

4、事物をありのままに見ることと、見た事物をありのままに表現すること

芭蕉や蕉風俳諧が、子規の俳句革新に対して与えた影響については、ここまで確認してきた通りである。しかし、これだけでは、議論は、蕉風俳諧が俳句革新の方向性や方法論に資したというにとどまってしまう。

つまり、蕉風俳諧が子規の目指した「新奇」な句の実作に、どのような影響を与えたか、言い換えれば、子規の古句研究が「新奇」な句の実作にどのように還元されたかの議論までは、至っていないように思われるのである。

この点、即ち、蕉風俳諧など子規が読むことを推奨した古句の、具体的かつ積極的な活用法に言及した先行研究は、あまりないように思われる。本項ではこの点について検討してみたい。

ところで、「事物をありの儘に詠」むと、ここまで繰り返してきたが、そこには少なくとも二つの段階が存在する。第一段階は、事物をありのままに見ることであり、続く第二段階は、見た事物をありのままに言葉で表現し、俳句の形にまとめ上げることである。

○俳句を作る時に古句の中より趣向を得来らんとするもの多し。古句を見るは善きことなれども之にのみ執着する時は陳腐なる趣向を生じ易し。古句は参考のために読むのみとして趣向は実景実物を見て考え起すべし。必ず新しき趣向を得ん。

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第一号、明治三〇年一月一五日）

ここでもやはり「趣向は実景実物を見て考え起すべし」と、「実景実事をありのまゝに写」すことや、事物をありのままに詠むことと多分に重なる内容のことを述べている。さらに、「古句は参考のために読むのみとし」と述べているが、これは文脈から、句作の「参考」であると考えられる。句作の「参考」ということは即ち、「趣向」を「実景実物を見て考え起」した句を詠む参考にせよとの意味であるととれる。要するに、古句を、事物をありのままに詠んだ句を作る参考にせよとの意であると考えられる。

事物をありのままに見ることと、それをありのままに言葉で表現することには、乖離がある。また、同じ「事物をありのままに表現する」ことであっても、絵画のようにカンバスの上で画材を使って表現するのと、紙に文字で書き付けて表現するのでは、同じようにはいかない。初学者が、目にした事物をありのままに言葉で表現するには、実践の手本が是非とも必要である。蕉風俳諧は、この溝を埋めるのに格好の存在であったのではないか。

以上をまとめると、次のように整理できるであろう。

第一に、芭蕉の句は、事物をありのままに詠んでいる点に「新奇」な句を生む可能性が存すると、子規は評価していた。

第二に、事物をありのままに詠んだ句を実際に作ることにおいて、芭蕉や蕉風の数多の句の中には、その手本となりうるものが多く含まれていると、子規は考えていたと推測される。

第二節　旧派俳諧のあり方

それでは、子規の俳句革新において批判の対象とされた旧派の句は、どのような性質のものであったのだろうか。『俳諧大要』において、子規は次のように述べている。

一月並風に学ぶ人は多く初めより巧者を求め婉曲を主とす宗匠亦此方より導く故に終に小細工に落ちて活眼を開く時無し初心の句は独活の大木の如きを尊ぶ独活は庭木にもならずとて宗匠達は無理にひねくりたる松などを好むめり尤も箱庭の中にて俳句をものせんとならばそれにても好し然り宗匠の俳句は箱庭的なり併し俳句界はかゝる窮屈なる者に非ず

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一日）

旧派の句は、「初めより巧者を求め婉曲を主とす」るもので、旧派宗匠たちはそこを起点として俳句初学者を指導するが故に、旧派に学ぶ人々は「終に小細工に落ちて活眼を開く時」が無いとしている。ここでの子規の旧派批判の表現は、先に引用した『俳諧大要』「修学第一期」の冒頭文の「巧を求むる莫れ拙を蔽（おほ）ふ莫れ」に対応する形で書かれている。

要するに、旧派の句は、対象をありのままに見ることも、それ

をありのままに表現することもなく、技巧に走り、かつ型にはまったものであったと、子規は評しているのである。

そのような作品は、過去の発句の表現や趣向をそのままに利用したもので、過去の作品の模倣の域を出ない。むしろ、模倣の域を出ないことを主眼としているとも言えるかもしれない。古人の作った「箱庭」のような仮構の中で、「無理にひねくりたる松など」のような人工物を趣向として重んじ、さらにそれを巧みで婉曲的な古人の言語表現をまねて表現する。ここからは、理屈の上では当然ながら、反復的な趣向を持った、反復的な言語表現の句ばかりが生まれてくることになる。

子規は、「宗匠の俳句は箱庭的なり」とした上で、「併し俳句界はかゝる窮屈なる者に非ず」、つまり、俳句の世界は、「箱庭」に喩えられるような窮屈なものではないと述べている。「箱庭的」な句に対置されるものが「事物をありの儘に詠」んだ句であるとすると、論はより明確になる。

句作の第一段階において、旧派が、古人の作り出した「箱庭」のような仮構の中で句作をはじめるのに対し、子規は、「造化」が作り出した「実景」の中で句作を始めるのが、「佳句を得る第一良法」であるとする。

続く第二段階において、旧派が「無理にひねくりたる松など」のような人工物を趣向として重んじるのに対し、子規は「趣向は実景実物を見て」考え起こせと訴える。

第三段階において、事物を見る姿勢において、旧派は古人が作り出し、反復的に継承してきたものの見方で対象を捉えようとすることを良しとするのに対し、子規は、事物をありのままに見ることを推奨した。

そして第四段階において、言語表現において、旧派が古人の作り出した巧みで婉曲的で、かつそれらの型にはまった表現を重視するのに対し、子規は、事物を見たままに言葉で表現せよとした。

このように見てくると、旧派の句が、仮構の中の、人工物を、古来の伝統的なものの捉え方で捉え、さらに伝統的かつ反復的な表現で言語化するという、尻すぼまりのような形で形成されていく過程が見て取れる。

これに対し、子規の提唱する「新奇」な句の作り方は、箱庭を出て「造化」の中にいくらも存する事物を、あるがままに見て捉え、さらに伝統にとらわれることなくあるがままに言葉で表現するという、末広がりの様相を呈していると言えるのではないか。そして、この裾野の広がりが、「新奇」な句を生むと、子規は考えたのではあるまいか。

第三節　事物をありのままに言葉で表現することと「即景」

第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくること。

第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言

葉で表現すること。

子規が芭蕉や蕉風俳諧に以上のような姿勢を看取し、これを評価していたことを確認してきた。そして、蕉風俳諧から子規が俳句革新の方向性や具体的手法を汲み取ろうとしてきたものと考察した。

では、子規自身は、このような俳句革新の方向性や具体的手法を、どのように俳句実作に還元していたのであろうか。

ここでは芭蕉が旅をして「造化」に「趣味」や「趣向」を求めたことを参考に、子規の紀行文と俳句を材料として、この問題を検討してみたい。

左は、明治二六年四月に新聞『日本』に発表された「鎌倉一見の記」からの引用である。

先づ由井が浜に隠士をおとづれて久々の対面うれしやととつおいつ語り出だす事は何ぞ。歌の話発句の噂に半日を費したり。即景

陽炎や小松の中の古すゝき

春風や起きも直らぬ磯慣松

ひとりふら〳〵とうかれ出でゝ縄手づたひにあゆめば行くともなしに鶴が岡にぞ着にける。銀杏を撫で石壇を攀ぢ御前に一礼したる後瑞垣に憑りて見下ろせば数百株の古梅やゝさかりを過ぎて散りがてなるも哀れなり。

銀杏とはどちらが古き梅の花

（「鎌倉一見の記」初出新聞『日本』明治二六年四月五日）

続いての引用は、明治二七年一二月に新聞『日本』に発表された、「総武鉄道」からである。

鉄道は風雅の敵ながら新らしき鉄道に依りて発句枕を探るこそ興あらめと二人して朝疾く出で立つ　本所の割下水にりて

即景

染汁の紫こほる小川かな

（「総武鉄道」初出新聞『日本』明治二七年一二月三〇日）

前者は、「由井が浜」にて、俗世間との交わりを断ってひとり暮らす人を訪ねた折に、「即景」で二句を詠んだものである。また後者は、現在の東京都墨田区、旧本所区にあった割下水が、恐らく凍っていたのを見て、「即景」で、染料の汁の紫が凍っている小川であることよ、と一句詠んだものである。

「即景」とは、「まのあたりに見る風景。眼前の景色」（小学館『日本国語大辞典』第二版）の意である。したがって、目の当たりにした風景をありのままに言葉で表現し、俳句にまとめたのだとしたら、先の芭蕉や蕉風俳諧の姿勢に重なる。『俳諧大要』の初出が明治二八年一一月一日以降であるので、「鎌倉一見の記」は二年半以上、「総武鉄道」でも一年弱の時間のずれが生じ、いずれの紀行も『俳諧大要』に先行する。しかしながら、想像をたくまし

くすれば、「鎌倉一見の記」の時にはすでに、明治二五年の「獺祭書屋俳話」を嚆矢とする、子規の俳句革新は始まっていた。したがって、蕉風俳諧から汲み取った俳句革新の方向性や具体的手法が、明治二六年の時点で既に確立していたとしても、不思議はないのではないか。

おわりに

以上、俳句革新を目指した子規が、一見、矛盾するごとき古句への視線を持っていたことの事実とその意味を論じてきた。

正岡子規は俳句革新を目指したが、過去の俳諧伝統をすべて捨て去ることを主張したわけではなかった。

子規が『俳諧大要』において、特に初学者向けに推薦する俳書名を逐一確認していくと、『蕪村句集』など蕪村関係の俳書と並び、『俳諧七部集』を始めとする蕉風俳諧及び、蕉風復興を志した俳書が数多く含まれていることに気づく。

旧派が無批判に尊崇した芭蕉の句や蕉風の俳書を読むことを、子規が敢えて推奨した理由は次のように考えられる。第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくる姿勢、そして第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言葉で表現する姿勢。子規はこれらの姿勢を、蕉風俳諧に看取し、そこに「新奇」なる句を生み出す可能性を認めたためであった。さらに実作の手本としても、蕉風俳諧を評価していたからと考えられる。

本稿では、子規の俳句革新の方向性や具体的方法に対し、蕉風俳諧が与えた影響について検討してきた。そこでは「事物をありの儘に詠」むという意の表現が繰り返されていた。では、子規の俳論として著名な「写生論」へは、ここからどのようにつながっていくのであろうか。

子規が、絵画の写生論を俳句にくみ入れたのが、中村不折の影響であることは、広く知られているところである。加えて子規は、画家であり俳人であった下村為山（牛伴）と次のような議論を展開したことを記している。

一はじめの程は空想ならでは作り得ぬを常とすやがて実景を写さんとするにつかまえ処無き心地して何事も句にならず度々経験の上写実も少し出来得るに至れば写実程面白く作り易きはなかるべし空想の陳腐を悟り写実の斬新を悟る亦此時にあり油画師牛伴と語る事あり牛伴曰く画に於ても空想を以て競争せんには老熟の者必ず勝ち少年の者必ず負く然れども写生を以てせんか少年の者の画く所の者亦老熟者を驚かすに足ると真なるかな

（『俳諧大要』第六　修学第二期。初出新聞『日本』明治二八年一二月八日）

右の記事により、子規の写生論は、不折によってその萌芽を得た

が、その枝葉の部分には為山をはじめとする他の画家の影響もあったことが示唆されよう。

さらに時代を遡って、坪内逍遙や二葉亭四迷らに代表される、文学における写実主義と俳句における子規の写生論の影響関係は、どのように整理できるであろうか。

子規の写生論と明治前期の文学・美術思潮との関わりについては、今後の課題としたい。

付記　引用に際し、旧字や異体字を通行の字体に改めた箇所がある。また、引用に際し、ふりがなを付した箇所がある。その場合は、ふりがなを（　）にて囲った。さらに引用に際し、傍線や文字囲を付した箇所がある。その他傍点や圏点は、引用本文による。『俳諧大要』、『俳句問答』、『獺祭書屋俳話増補』、「俳諧反故籠」の引用は、講談社版『子規全集』第四巻（昭和五〇年一一月）による。また、「鎌倉一見の記」「総武鉄道」の引用は、講談社版『子規全集』第一三巻（昭和五一年九月）による。『俳文学大辞典』の引用は、加藤楸邨ほか監修、尾形仂ほか編『俳文学大辞典』普及版（平成二〇年一月、角川学芸出版）による。

〈注〉

（1）『俳諧大要』第六　修学第二期に、「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪えず称して月並調といふ」（初出新聞『日本』明治二八年一二月二日）とある。

（2）『俳句問答』初出新聞『日本』明治二九年七月二七日

（3）『獺祭書屋俳話増補』より「芭蕉雑談」内「雄壮なる句」に、「元禄以後俳家の輩出して俳運の隆盛を極めたるは明和天明の間なりとす。白雄は寂栞を著して盛んに蕉風を唱道せりと雖も其神髄を以て幽玄の二字に帰し終に豪壮雄健なる者を説かず。其作る所を見るも句々繊巧を弄し婉曲を主とするのみにして芭蕉の堂に上る事を得ず。蓼太は敏才と猾智とを以て一時天下の耳目を聳動せりと雖も固より其眼孔は針尖の如く小なりき。蕪村、暁台、蘭更の三豪傑は古来の蕉風外に出入して各一派を成せり。此三人の独得なる処は芭蕉及び其門弟等が当時夢想にも知り得ざりし所にして俳諧史上特筆大書すべき価値を有す。されば其俳句中には雄健の筆を以て豪壮の景を為したる者に匱しからず。然れども彼等の壮は芭蕉の壮に及ばず彼等の大は芭蕉の大に及ばざりき。文政以後蒼軋、梅室、鳳朗の如き群蛙は自ら好んで三尺の井中に棲息したる者固より与に大海を談ずべからず。是に於てか芭蕉は揚々として俳諧壇上を濶歩せり。吁嘻芭蕉以前已に芭蕉無く芭蕉以後復芭蕉無きなり」（初出新聞『日本』明治二六年一二月一三日）とある。

（4）『俳文学大辞典』「俳諧続七部集」項によれば、同書は上巻に『深川』『卯辰集』『韻塞』『となみ山』、下巻に『有磯海』『芭蕉庵小文庫』『千鳥掛』を収める。

（5）『俳文学大辞典』「発句三傑集」項。山本和明によれば、『発句三傑集』は、「闌更七一〇句余、暁台七五〇句余、蓼太五三〇句余、計一九九〇句余の発句を四季別・月順で類題ごとに整理して収載」し

たものである。

（6）『俳文学大辞典』田中道雄「去来発句集」項によれば、同書の下巻に当たる書が『丈草発句集』である。

（7）『俳文学大辞典』「蕪村句集」項にて、尾形仂は「正岡子規は本書を通して蕪村を写生の先達と仰ぎ、近代俳句の路線を決定した」と評している。

（8）『俳文学大辞典』加藤定彦「故人五百題」項は、「天明七（一七八七）・五、松露庵蔵版。（略）烏明が先師鳥酔に陪従していたころから書き留めた故人の句を、亀足・瓜州の両名が校合、四季別五百題（実際は六二四題）に分類・整理し上梓したもの。蝶夢編『類題発句集』と重なる句が多く、同書を参照しつつ師友の遺句を増補して成ったものであろう。（略）初版奥付には「門人之外不許鬻事」とあって、一門内部のみの刊行物であったが、軽便なために好評を博し、書肆に版木が譲られてから市販され、無刊記版のほかに桑村半蔵ほかの求版、天保一〇年（一八三九）の英文蔵による再版、同一五年の英大助による横本一冊の重版、文久三年（一八六三）の英屋文蔵による三刻など広く流布した」とする。

（9）子規の蕪村研究については、本稿では詳しく扱わないが、佐藤勝明ほか『蕪村句集講義』（内藤鳴雪ほか著、佐藤勝明校注『蕪村句集講義３』、平成二三年二月、平凡社）などに詳しい。

（10）佐藤勝明は、前掲注９『蕪村句集講義』の「解説」にて、「（稿者注：点取り俳諧の横行によって、）芭蕉の俳諧とは遠く離れた姿ながら、それでも芭蕉は彼らの守護神であり、月次流宗匠の存在基盤なのであった。この矛盾した事態にいち早く気づき、旧派（子規や尾崎紅葉らを新派と呼ぶのに対して、幕末以来の俳諧を行う人々に与えられた呼称）を徹底攻撃したところに、子規らの俳諧革新は推進されていく。その際に子規がとった方法は、「芭蕉へ帰れ」ではなく、旧派の宗匠が盲目的にあがめる（同時に利用する）芭蕉を冷静にとらえ直すと同時に、本格的な評価対象からはずれがちの蕪村に光を当て、その真価を世に問うことであった」とする。また、井上泰至は「子規からすれば、旧派の崇拝する芭蕉への批判を過剰に行い、代わって蕪村の句の価値を発見・宣伝することは、（稿者注：子規の俳句革新において）重要な戦略であった」（井上泰至『子規の内なる江戸　俳句革新というドラマ』平成二三年七月、角川学芸出版）としている。

（11）復本一郎『俳句から見た俳諧―子規にとって芭蕉とは何か―』平成一一年九月、お茶の水書房

（12）『獺祭書屋俳話増補』より「芭蕉雑談」内「補遺」項。初出新聞『日本』明治二七年一月二七日

主指導教員（堀竜一教授）、副指導教員（廣部俊也准教授・足立幸子教授）